

「最終手段」戦略の例としてのフランス語の *c'est* 分裂文： 対照的な観点から*

田中 優生
東京大学大学院総合文化研究科
gotji2n1@gmail.com

要旨

本稿はフランス語の分裂文の特殊な用法を切り口に、最終手段 (last resort) の性質について論じる。フランス語では、主語 *wh* 疑問文に対する答えとして義務的に分裂文が用いられ、この際の分裂文は、通常の分裂文とは異なり、網羅性 (exhaustivity) などの強調的な意味を表さない。他方、目的語 *wh* 疑問文の場合は、通例答えとしては非分裂文が用いられ、分裂文が用いられた場合には網羅性を表す。本稿はこの主語・目的語の非対称性 (subject/object asymmetry) を説明するために、フランス語の主語の特質について、スコープ関係や接辞左方転移 (CLLD) 構文を見ながら考察する。その上で、動詞の主要部移動や左方周縁部の微細構造に関する経験的・理論的見地から、フランス語の通常の文の主語は *C* ドメインに移動し、主題 (topic) として解釈されるものと分析する。主題のままでは質問と答えの整合性 (Question-Answer Congruency) を満たさず、疑問文の答えとして不適格なので、主語 *wh* 疑問文への答えに於いて「最終手段」として分裂文を使うのだと説明される。「最終手段」として用いられる言語表現はそれが本来持つ意味機能を表さないという通言語的な原則も同時に示唆される。

1 はじめに

フランス語では、主語 *wh* 疑問文に対する答えは、完全文で答える場合には分裂文でなければならない。

- (1) Q: Qui est arrivé ?
who is arrived
'Who arrived?'
- A1: #Pierre est arrivé.
Pierre is arrived
'Pierre arrived.'
- A2: C'est Pierre qui est arrivé.
it's Pierre who is arrived
'It's Pierre who arrived.'

無論、問われている要素 (この場合、*Pierre*) だけで答えることも可能だが、完全文を作る場合には、(1, A1) の非分裂文は、それ自体は文法的であるにも関わらず、(1, Q) への答えとしては一般に容認不可能であり、代わりに分裂文 (1, A2) が使われる。重要なことに、(1, A2) は分裂文を用いているにもかかわらず、分裂文に一般的に見られる網羅性 (exhaustivity) を表さない。したがって、英語に於いて (3, A) にあるように分裂文による答えの後で網羅性をキャンセルするのが不適格であるのと違い、フランス語で (1, A2) の後に (2) の文を続けても不適格にはならない。

- (2) ...Et Marie est aussi arrivée.
and Mary is also arrived
'And Mary also arrived.'
- (3) Q: Who arrived?
A: It is Pierre who arrived. #And Mary also arrived.

*本稿は、東京大学教養学部にて2023年1月付けで提出した卒業論文を元にしたものである。ご指導頂いた小田博宗先生、稲葉治朗先生、渡邊淳也先生にこの場を借りてお礼申し上げたい。

一方、目的語 wh 疑問文の場合、答えは通常非分裂文になり、分裂文を使った場合には網羅性を表す。したがって、(4, A2) に (5) を続けると、(1, A2) に (2) を続けた場合よりも容認度は著しく下がる。

- (4) Q: Qu'est-ce que tu as mangé ?
 what-is-it that you have eaten
 'What did you eat?'
- A1: J'ai mangé un pain au chocolat.
 I-have eaten a bread at.the chocolate
 'I ate a pain au chocolat.'
- A2: C'est un pain au chocolat (que j'ai mangé).
 it's a bread at.the chocolate that I-have eaten
 'It's a pain au chocolat (that I ate).'
- (5) ??...Et j'ai aussi mangé une baguette.
 and I-have also eaten a baguette
 'And I also ate a baguette.'

本稿の主目的は、上述のようなフランス語の主語 wh 疑問文と目的語 wh 疑問文の答えに於ける分裂文の使用についての非対称性を形式的に説明することである。本稿では、フランス語の通常の文の主語は主題 (topic) であり、Rizzi (1997) の微細構造に於いて Spec,TopP を占めるものと分析する。その上で、主題のままでは主語 wh 疑問文の答えとして不適格なので、主語を wh 疑問文の答えとしての焦点にするために、「最終手段」(last resort) として分裂文を使うのだと説明する。さらに、焦点構文は一般に最終手段戦略で生じた場合には意味的に弱くなり、網羅性などの強調的な意味を表さなくなることが、他の言語からの証拠からも示唆される。

2 フランス語の主語の特質

2.1 平叙文に於ける逆転スコープの欠如

英語では、(6a) のような通常の SVO 文は逆転スコープを認めるが、(6b) のように主語に主題化 (topicalization) を施すと、表層スコープしか取れなくなる。(6c) のような主語 wh 疑問文でも、目的語が広いスコープを取ることはできない (Mizuguchi 2014)。

- (6) a. Someone loves everyone. (SOME>EVERY, EVERY>SOME)
 b. ?As for someone, he or she loves everyone. (SOME>EVERY, *EVERY>SOME)
 c. Who loves everyone? (WHO>EVERY, *EVERY>WHO)

シンガポール英語では、主語と動詞の一致が義務的でないため、(7a-b) に示すように、(6a) に相当する文が2通りに表現され得る。しかし、Lee (2022) が示している通り、(7a-b) は意味的に同一ではない。主語と動詞の一致を起こした (7a) はアメリカ・イギリス英語の (6a) と同様に逆転スコープを認めるが、一致のない (7b) は表層スコープのみを認める。

- (7) a. Someone **loves** everyone. (SOME>EVERY, EVERY>SOME)
 b. Someone **love** everyone. (SOME>EVERY, *EVERY>SOME)

Lee (2022) は、(7b) に於ける *someone* は主題として機能しており、C ドメインに在するとしている。

日本語でも、(8a) に見られる主格標識「が」で標示された名詞句は逆転スコープを認める (cf. Tanaka (2002): 638) が、(8b) に見られる主題標識「は」で標示された名詞句は逆転スコープを認可しない。

- (8) a. 誰か**が**みんなを愛している。 (SOME>EVERY, EVERY>SOME)
 b. 誰か**は**みんなを愛している。 (SOME>EVERY, *EVERY>SOME)

(8b) では主題標識「は」が必ず「最低一人は」という追加の語用論的含意を表すが、それを捨象してスコープ関係だけを見ると、表層スコープのみを許容するという意味で英語の (6b) と類似している。

重要なことに、フランス語の (9a) のような通常の SVO 文は、逆転スコープを取れない点で英語の (6b) や日本語の (8b) と同じパターンに属する。(9b) のような主語 wh 疑問文も、逆転スコープを認可しない。

- (9) a. *Quelqu'un aime tout le monde.*
 someone loves all the world
 'Someone loves everyone.' (SOME>EVERY, *EVERY>SOME)
- b. *Qui aime tout le monde ?*
 who loves all the world
 'Who loves everyone?' (WHO>EVERY, *EVERY>WHO)

(6b), (7b), (8b) より、主題は逆転スコープを認可しないと考えられる。また、(6c) より、wh 要素も逆転スコープを認めないと分かる。したがって、以下のような一般化が可能である。

- (10) 主題や wh 要素は、それを超えた逆転スコープを認めない。

この一般化を鑑みた時、フランス語の平叙文 (9a) に於ける逆転スコープの欠如は、(9a) に於いて *quelqu'un* が主題として機能している可能性を示唆する。

2.2 接辞左方転移構文 (CLLD) に於ける主語・目的語の非対称性

接辞左方転移構文 (CLLD) は、(11a) のように主語以外の要素を左方転移させた場合には主題化の機能を担うが、(11b) のように主語を左方転移させた場合には強調の意味が前面に出る。

- (11) a. *Pierre_i, je l_i'ai vu.*
 Pierre I him-have seen
 'As for Pierre, I saw him.'
- b. *Pierre_i, il_i est parti.*
 Pierre he is left
 'Pierre (but no one else) left.'

決定的なことに、以下に示すように、(11a) を (12a) のような目的語 wh 疑問文への答えとして用いることはできないが、(11b) は (12b) のような主語 wh 疑問文への答えとして会話で (周縁的に) 認められる (cf. De Cat (2007): 22-23)。

- (12) a. *Qui as-tu vu ? #Pierre_i, je l_i'ai vu.*
 who have-you seen Pierre I him-have seen
 'Who did you see?' 'As for Pierre, I saw him.'
- b. *Qui est parti ? Pierre_i, il_i est parti.*
 who is left Pierre he is left
 'Who left?' 'Pierre (but no one else) left.'

このことも、フランス語の通常の文の主語が主題だと考えると説明が付く。CLLD は転移される要素が通常の文に於いて主語でなく、主題でない場合には主題化手段として用いられるが、転移される要素が通常の文で無標な主題として機能する主語の場合には対照性を表す (つまり、既に主題であるものを「主題化」することはできない)、と言える。

3 フランス語に於ける主語と動詞の統語的位置

3.1 フランス語に於ける動詞の位置について

Schifano (2018) は、フランス語の動詞は他のロマンス諸語と比べて極めて高い位置に移動していると主張している。決定的な証拠として、フランス語 (13a) では、イタリア語 (13b) などと違い、定形動詞が “probably” などの文修飾副詞にも義務的に先行する。

- (13) a. *Antoine [confond probablement / *probablement confond] le poème avec un autre.*
 Antoine [confuses probably / probably confuses] the poem with an other
 'Antoine is probably confusing the poem with another.' (Schifano 2018: 63)
- b. *Gianni [*confonde probabilmente / probabilmente confonde] questa poesia con un'altra*
 Gianni [confuses probably / probably confuses] this poem with an other
 'Gianni probably confuses this poem with another.' (ibid.: 8)

(13a) と (13b) を比較すると、フランス語の動詞は表層構造に於いて極めて高い位置に存在していることが分かる。重要なことに、(14) に示す通り、主語 wh 疑問文に於いても (13) と同じ分布が見られる。一般的に主語疑問文に於ける wh とそれに一致する動詞は C ドメインに在すると想定されているので、フランス語に於いて平叙文でも疑問文でも動詞と副詞の線形順序が変わらないという事実は、フランス語の動詞が平叙文に於いても C ドメインに上昇していることの証拠として解釈できる。

- (14) Qui [confond probablement / *probablement confond] le poème avec un autre ?
 who [confuses probably / probably confuses] the poem with an other
 ‘Who is probably confusing the poem with another?’ (cf. (13a))

Schifano はフランス語の動詞は I ドメインに移動するとしているが、それが唯一の論理的可能性という訳ではない。「極めて高い位置」は C ドメインである可能性もある。節全体を射程に取る “probably” のような文副詞に動詞が先行するという事実は、この可能性を支持する (実際、井上 (2009) は “probably” のような認識様態副詞は CP 領域に存するとしている)。

フランス語の動詞は C ドメインに移動するという本節での議論と、フランス語の主語は主題として機能しているという 2 章での観察から、本稿ではフランス語の主語は Rizzi (1997) の分裂 C システムに於いて Spec,Top(ic)P、動詞は Top を占めていると分析する。即ち、フランス語の通常の文は以下のような構造になっていると考えられる。

- (15) [_{TopP} [NP Subject]] [_{Top'} [Top Verb ...

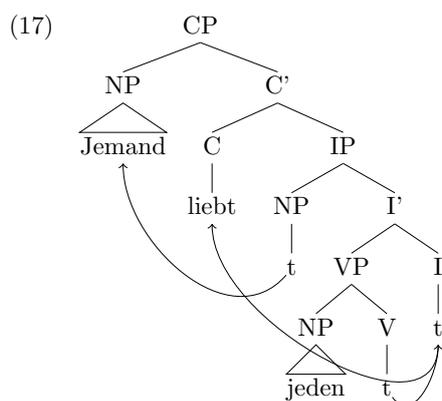
3.2 構造的差異としての逆転スコープの存否

構造的に「高過ぎる」NP は逆転スコープを許容しないと考えると、2.1 節で見られたスコープ関係に関するデータに統語的な説明を与えることができる。英語の通常 (6a) の文の主語と日本語の「が」で標示された主語 (8a) は Spec,IP を占めるが、日本語の主題標識「は」で標示された要素 (8b) とフランス語の平叙文主語 (9a) は Spec,TopP を占めると考えられる (日本語については Endo (2007) などを参照せよ)。前の二つが逆転スコープを認め、後ろの二つは認めないのは、後者は統語的位置が「高過ぎる」からだ、と説明できる。

ここでの議論は、V2 言語であるドイツ語も通常の SVO 文では (音韻的強勢なしでは) 逆転スコープを認めないという事実によって補強される。

- (16) Jemand liebt jeden.
 someone.NOM loves everyone.ACC
 ‘Someone loves everyone.’ (SOME>EVERY, *EVERY>SOME)

一般に受け入れられている (16) の構造は以下の通りである。



(a) フランス語の主語、(b) 日本語の「は」で標示された主語、(c) ドイツ語の前域要素は何れも逆転スコープを認めず、(a)、(b) は Spec,TopP に、(c) は Spec,CP に存するため、以下のような一般化が可能である。

- (18) C ドメインの要素は、それを越えた逆転スコープを認めない。

wh 要素は一般に C ドメインに (顕在的か非顕在的かは言語によって異なれど) 移動すると想定されているため、上述の一般化は 2.1 節の wh 疑問文に関するデータをも統一的に説明できる。

4 フランス語に於ける主語・目的語の非対称性：分裂文と転移構文

4.1 「最終手段」戦略としての分裂文使用

3章での議論から、フランス語の通常の文の主語は Spec,TopP へと移動し、主題として解釈される。しかし、主題は疑問文への答えの要素としては使えないことが (19b) や (20b) に見られる主題化を施した文の不適合性から確認される。(19) から分かるように、疑問文で問われている部分と、それに対応する答えの部分とは焦点 (focus) であり、主題ではない。

- (19) a. [What]_{Focus} did you eat? — I ate [the apple on the table]_{Focus}.
b. [What]_{Focus} did you eat? — #As for [the apple on the table]_{Topic}, I ate it.
- (20) a. あなたはどなたですか? — 私 [は/#が] 李です。
b. 李さんはどなたですか? — 私 [#は/が] 李です。

これらのことから、フランス語で主語疑問文 (1, Q) への答えとして通常の文 (1, A1) を用いると質問と答えの整合性 (Question-Answer Congruence) を満たせず、不適合になると説明できる。Spec,TopP から Spec,FocP への移動は、(21) に示す Erlewine (2016) の「指定部から指定部への反局所性制約 (Spec-to-Spec anti-locality constraint)」や (23) に示す Rizzi (2006) が主張する規準凍結 (criterial freezing) に該当するため認可されないと考えられる。したがって、(1, A2) に見られる分裂文は、主語を Spec,TopP 以外の位置に置くための構造を作ってこうした制約を回避する「最終手段」戦略であり、特定の要素に強い焦点を当てるモチベーションがないために、網羅性を表さない、と説明できる。

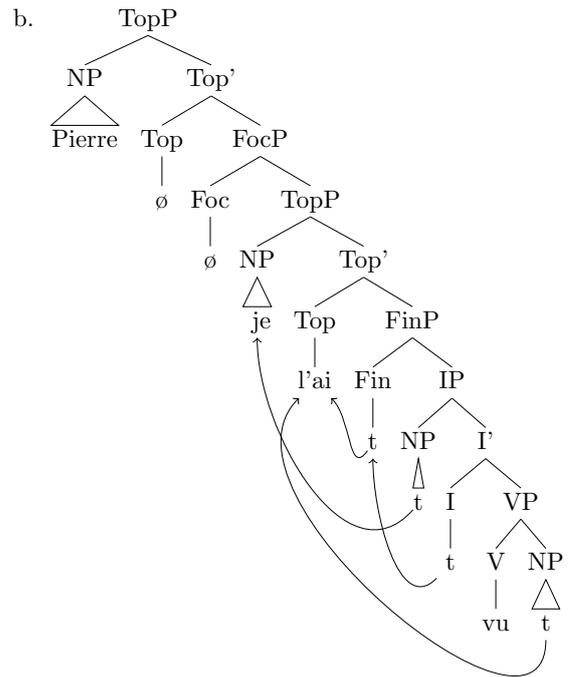
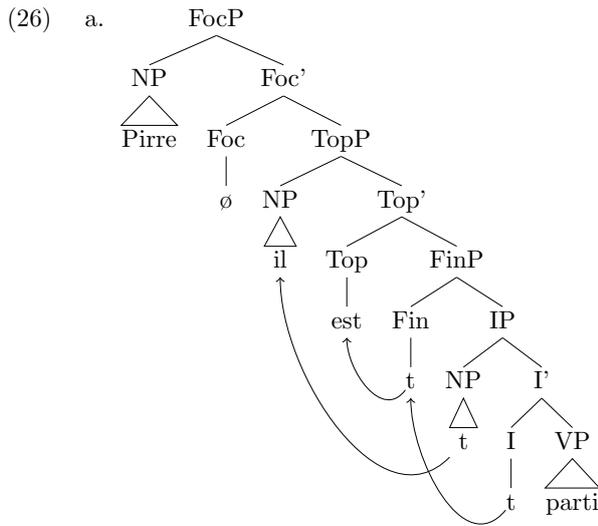
- (21) **Definition: Spec-to-Spec Anti-Locality**
A'-movement of a phrase from the Specifier of XP must cross a maximal projection other than XP.
- (22) **Definition: Crossing**
Movement from position α to position β crosses γ if and only if γ dominates α but does not dominate β .
(Erlewine (2016): 445)
- (23) **Definition: Criterial Freezing**
A phrase meeting a criterion is frozen in place. (Rizzi (2006): 112)

重要なことに、この性質はフランス語の分裂文一般の性質ではない。(24)~(25) は、斜字体で示した形の上では同一の分裂文が、主語 wh 疑問文への答えとして用いられたときには網羅性を表さないが、他の文脈では網羅性を表し得ることを示している。このことは、網羅性が分裂文自体の内在的・固定的な性質というよりも、それが「最終手段」戦略として使われているか、必要を超えて強調の手段として用いられているかに依存しているということを示唆している。

- (24) Q: Qui a écrit ce livre ?
who has written this book
'Who wrote this book?'
- A: *C'est moi qui ai écrit ce livre.* Monsieur Suzuki est le co-auteur.
it's me who have written this book Mr. Suzuki is the co-author
lit: 'It is me who wrote this book. Mr. Suzuki is the co-author.'
- (25) *C'est moi qui ai écrit ce livre.* Tous les droits d'auteur m'appartiennent.
it's me who have written this book all the rights of-author to.me-belong
'It is me who wrote this book. All the copyrights belong to me.'

4.2 CLLD への拡張

2.2 節で観察された CLLD の解釈に関する主語と目的語の非対称性も、同様の枠組みで分析できる。目的語を左方転移させた場合には主題化の機能を担い、当該の要素は Spec,TopP を占めるが、主語は通常の文に於いて Spec,TopP に在するため、「更なる主題化」を加えることができず、左方転移させた場合には Spec,FocP を占めて強調的な意味を表す、と分析できる。(11a-b) に対して、以下のような構造が考えられる。



5 他言語への拡張

フランス語の分裂文は「最終手段」戦略として用いられる時には網羅性を表さないという4節での分析は、焦点化構文は「最終手段」戦略として用いられる時には強調の意味を表さない、と一般化できる。ここではインドネシア語の分裂文 (5.1) 及び英語の *do* サポート (5.2) を取り上げ、何れも「最終手段」戦略として用いられている場合には、当該の構文によって通例表される網羅性などの強調的な意味が消失することを示す。

5.1 標準インドネシア語の分裂文

標準インドネシア語では、(27a) に示すように、主語 *wh* 疑問文は、述語が VP や AP である場合には、関係代名詞 *yang* を伴った分裂文でなければならない。一方、目的語 *wh* 疑問文の場合は、(27b) に示すように、*wh*-in-situ の疑問文が使われる。重要なことに、(27a) では、*yang* の生起が義務的であり、(27b) の *wh*-in-situ のような形で主語 *wh* 疑問文を用いることはできない。このことは、インドネシア語に於いて主語の Spec,IP から Spec,CP への移動が「近過ぎる」ために (21) に示す反局所性制約に違反するためだと分析できる。したがって、(27a) に見られる分裂文は、さらなる構造を作ることでこの制約を回避し、*wh* 移動を可能にするための「最終手段」だと言える。さらに重要なことに、*yang* を用いた分裂文は、(28) のように平叙文で「必要を超えて」使われた場合には網羅性を表すが、(27a) のように義務的に用いられる分裂疑問文にそのような含意はない。したがって、インドネシア語の分裂文は、(27a) のように「最終手段」として用いられる場合には強い焦点の意味が消失するという点で、フランス語の分裂文と統一的に分析できる。

(27) a. Siapa *(*yang*) men-curi mobil itu?
 who REL ACT-steal car that
 'Who stole the car?'

b. Anak itu men-curi apa?
 child that ACT-steal what
 'What did the child steal?'

(28) Adi (*yang*) datang hari ini.
 Adi REL come day this
 with *yang*: 'It is Adi who will come today.' / without *yang*: 'Adi will come today.'

5.2 英語の助動詞 *do*

英語の助動詞 *do* は、(29a-b) のように肯定文で用いると強調の意味を表す。(29a) では「『本当に』 顔色が悪いよ」と後続の VP の程度を強めており、(29b) では「顔色が悪く『は』あるが…」と譲歩的な焦点を表している。(29a-b) から *do* を取り去っても非文にはならないが、*do* があるかないかで意味は異なる。他方、(30a-c) のような *do* サポート環境では、*do* は義務的に出現し、(29a-b) の *do* とは異なり強調の機能を持たない。否定文 (29a) では IP と VP の間に余計な投射 (NegP) があるために接辞繰り下げ (affix-hopping) が阻害される。疑問文 (29b-c) では主語と助動詞の倒置が義務的だが、英語の語彙的な動詞は (イギリス英語の *have* などの一部の例外を除いて) I ドメインまで上昇できないため、ドイツ語などで見られる V-I-C 移動ができない。このように、(30a-c) で *do* が義務的に挿入されるのは、非文になる派生を回避するための、典型的な「最終手段」の例である。したがって、焦点化構文は「最終手段」戦略として用いられる時には強調の意味を表さないという一般化は、ここでも成り立つ。

- (29) a. You *do* look pale today. You should go home immediately.
b. You *do* look pale today, but you should finish the work anyway.
- (30) a. You *do* not look pale today.
b. Do you want to go home?
c. What *do* you want?

6 おわりに

本稿では、フランス語に於ける主語 *wh* 疑問文への答えとして義務的に分裂文が生じる理由について考察した。具体的には、スコープ関係と接語左方転移のデータの観察、及び動詞の主要部移動に関する経験的・理論的見地から、フランス語の通常の文の主語と動詞は何れも C ドメインに移動し、主語は Spec,TopP に在して主題として解釈されると分析した。フランス語の主語 *wh* 疑問文への答えとして通常の文を用いると、通常の文の主語は Spec,TopP に位置し、主題として機能するため、質問と答えの整合性を満たさず、それ故分裂文を使う必要性が生じるのだと主張した。さらに、インドネシア語の分裂文、英語の *do* サポートに関する観察から、焦点化構文は「最終手段」として用いられる時には強い焦点の意味を表さないという一般的な性質を明らかにした。さらに広範な言語・現象に於いても同様のことが成り立つかどうかの検証が待たれる。

References

- De Cat, Cécile. 2007. *French dislocation: Interpretation, syntax, acquisition*, volume 17 of *Oxford Studies in Theoretical Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio. 2007. *Locality and information structure: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Erlewine, Michael Yoshitaka. 2016. Anti-locality and optimality in Kaqchikel agent focus. *Natural Language & Linguistic Theory* 34: 429–479.
- Lee, Si Kai. 2022. On agreement-drop in Singlish: topics never agree. *Glossa: a journal of general linguistics* 7: 1–27.
- Mizuguchi, Manabu. 2014. Phases, labeling, and *wh*-movement of the subject. In *32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan, Gakushuin University, Tokyo, November*, volume 8.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar: Handbook in generative syntax*, ed. Liliane Haegeman, 281–337. Dordrecht: Springer.
- Rizzi, Luigi. 2006. On the form of chains: Criterial positions and ECP effects. In *Wh-movement: Moving on*, ed. Norbert Corver Lisa Lai-Shen Cheng, volume 42 of *Current studies in linguistics series*, 97–134. Cambridge: MIT Press.
- Schifano, Norma. 2018. *Verb movement in Romance: A comparative study*. Oxford: Oxford University Press.
- Tanaka, Hidekazu. 2002. Raising to object out of CP. *Linguistic Inquiry* 33: 637–652.
- 井上, 和子. 2009. 生成文法と日本語研究: 「文文法」と「談話」の接点. 東京: 大修館書店.